

世界選手権直前の国内ビッグレースで優勝したのは2名のベテラン選手。
経験を大舞台で活かせる日はもうすぐだ。

田島利佳と鹿島田浩二

6月5日、群馬県で行なわれた「東大大会」。エリートクラスでは男子で鹿島田浩二選手、女子では田島利佳選手と、長年に渡って日本代表チームを支えてきた選手が優勝しました。今回は、その両選手へのインタビューを掲載します。2人は8月・愛知での世界選手権(WOC)で何を視野に入れて、どのように走ろうと考えているのでしょうか？

Q1

「東大大会での優勝おめでとうございます。お二人は東大大会直前までWOCのために愛知でトレーニングされてきました。そのトレーニングが東大大会で生きた部分はありましたか？」

田島：

「そうですね、イギリスチームの組むコースを走ったのですが、アップもきつく、また細かい地形の中でのナビゲーションをしたり、足下が悪い中走り続けたりしていました。東大大会は気持ちよく走れるスピーディなトレインだったので、メンタルの部分でストレスがなく余裕を持って走ることができました。」

鹿島田：

「直接的には特にありません。逆に東大大会が、一連のトレーニングに生きた部分があります。2日前の金曜日にかかなり追い込んでトレーニングし、前日の土曜日は軽めのトレーニングに抑えました。結果日曜にはフレッシュに70分走れました。現状での自分の回復力をチェックできた点で大きな収穫でした。」



鹿島田浩二選手プロフィール

1970年生まれ。中学校入学と同時にオリエンテーリングを始める。高校在学中に現在の日本ランキングイベントに当たる大会で優勝するなど、ジュニア時代から国内トップの座に迫る活躍を見せる。インカレ個人戦に2度優勝、1994年度全日本選手権優勝。世界選手権へは1991年以来8大会連続出場している。

Q2

「お二人はWOCに向けてロング以外の種目を目指すことになると思いますが、ロングタイプの東大大会をWOCに向けての準備の中でどのように位置付けていましたでしょうか。」

田島：

「特にロングだからとどうとこだわってはいませんが、現状のスキルとメンタルのチェック、体調の状況把握等をしようと考えていました。リレーやミドルに向けても70分は良い練習になりますね。後半ペースが落ちても走れるところまでとにかく走ろうとしていました。」

鹿島田：

「そういう意味では、オリエンテーリ

ングのテクニカル、メンタルな面でのチェックとして位置付けていて、レース全体の完成度というのはあまり意識していませんでした。結果的には自分でも満足いく完成度の高いレースでしたが、ただ、足場や植生が愛知に比べて走りやすく、技術的にも難易度は低かったため、その点は差し引いて評価したほうが良いかもしれません。」



田島利佳選手プロフィール

1971年生まれ。オリエンテーリング一家に生まれ、幼少時からオリエンテーリングに親しみ、将来を嘱望される。短大2年次のインカレ個人戦(現在の「ロング」)で2位。世界選手権には1995年に初出場、合計5回出場。東大大会終了時点の日本ランキングは1位。

Q3

「今年のWOCを闘う上で『キー』となる要因は何だと思われませんか。また、その対処に向けた準備として特にどのようなことを注意されていますか。」

田島：

「地元開催のメリットを上手く取り入れていくことは大きいですね。ホームトレイン、自分たちの文化、自分たちの言語、自分たちが食べているもの、よく知っている夏の天気。そして周囲の方々の大きな声援、それら全てをプラスと思うようにすること。反面、それが仇にならないよう勝手に大きなプレッシャーを作り出さないこと、タカをくくりすぎないこと。」

イメージトレーニングなどしていません。
それと一番今の自分にとっては良い体調をキープすることが重要です。日々体調管理に気をつけてトレーニングしていくことが大事ですね。」

鹿島田：

「ひとつの『キー』にまとめあげるとは難しいと思います。テレイン、気候、メンタル面すべてがやっぱり重要な要因だと感じます。ただ、すべての根源となる要因をあえてあげるとすれば、自分のフィジカル面でのコンディショニングになるでしょう。フィジカル面で良い状態にあればメンタル、テクニカルにもポジティブになれますから。そういう意味では体調を崩さず質の良いトレーニングを積んでいくことが大切だと感じます。」

Q4

「東大会直前の愛知滞在中、お二人はイギリス選手やノルウェー選手と接する機会もあったようです。彼らの愛知のテレインその他に関するコメントで印象に残るものがあったら教えてください。」

田島：

「トレーニング中の移動手段は基本的にイギリスチームにはお世話になり、夜のミーティングまで参加させていただいて、話をする機会は多くありました。
マッパーは誰？コースプランナーは？とすかさず聞いてきたこと。マイクロなルートチョイスは非常に重要であること。
水分補給の仕方にはチームで徹底的に話し合っただけのこと。
道回りや山を直進するかのルートチョイストレーニングでは遠回りと思われた道回りが3分も速かったわーと驚いていたこと。
どの国にも今年はチャンスがある、もちろん日本が一番有利だよと言っていたこと。
田んぼの隣が畑でどうして水が入っていかないの？と不思議がっていたこと。
コーチがパンツ一丁とレガースで設置していたこと。
日本語で書かれた賞状（全日本）を大切に保管してあり、宝物！と言っていたこと。」

鹿島田：

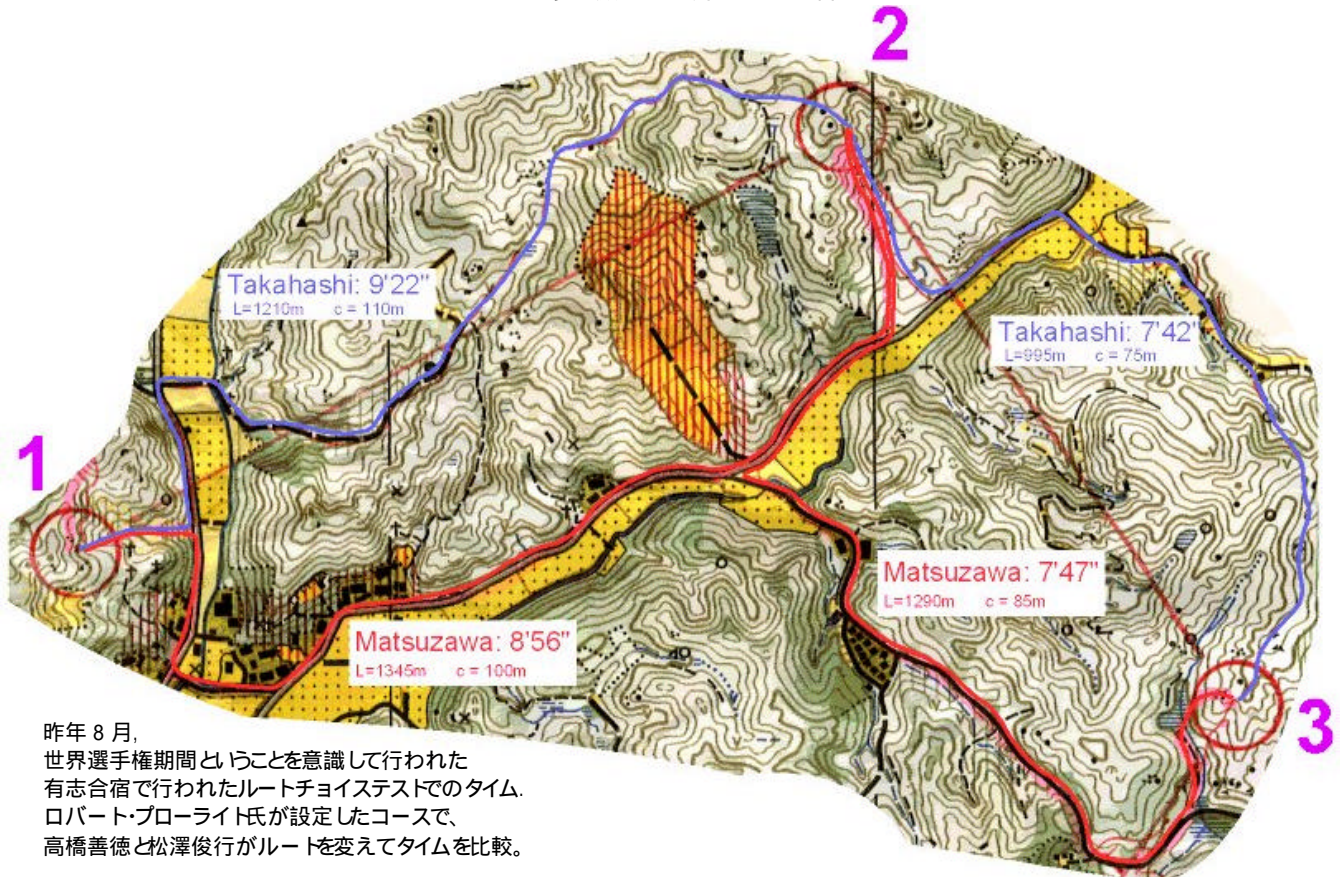
「25度を超えたやや蒸し暑い日に、だるそうな顔で『8月はもっと暑いのか？8月の藪はもっと濃いのか？笹はもっと成長するのか？ウイニングタイムは本当に守られるのか？でも日本のオリエンテーリングはとってもチャレンジングで面白いよ！』」

Q5

「お二人は長らく日本チームの中心選手としてご活躍されて来ました。今年のWOCが一つの集大成になるかと思われませんが、意気込みをお聞かせください。チーム全体への期待等もお話いただくと嬉しく思います。」

田島：

「こどもの時に『日本で世界選手権を！』と夢のような話を聞いた覚えがあります。それが現実になりつつあります。その舞台に競技者としてチャレンジできることに喜びを感じるとともに少し不思議な気持ちでもあります。決勝を走りたい。その中でいいパフォーマンスを発揮したい。チームは、今年はもっと面白い。みなさんが熱狂的な応援をするチームができつつあると信じています。」



昨年8月、世界選手権期間とらことを意識して行われた有志合宿で行われたルートチョイステストでのタイム。ロバート・プローライト氏が設定したコースで、高橋善徳と松澤俊行がルートを変えてタイムを比較。

鹿島田：

「あまり今までをまとめあげような集大成という意識はないかもしれませんが。ただ地元開催という願ってもないチャンスが、自分の現役時代にめぐってきた幸運に感謝し、ただただ悔いのないように努力してきました。平凡ではあるけれど、今まで達成できなかった予選通過を最低限の目標として残りの期間準備したいと思います。」

チームについていえば、今年がWOC史上もっとも充実したチームになると信じています。ホームというメンタルな面でのメリットを生かして、堂々とした走りを期待したいですね。」



ニッポンの夏！ 世界選手権の夏！

Q6

「お二人は『ベテラン』と言って良い域にあると思います。この記事も多くの『ベテラン』の方が読まれています。そこでお伺いしたいのですが『ベテラン』の強みとは何だと思えますか。」

田島：

「自分は歳だけ重ねていてあまりオリエンテーリングの成長は??という気がしないでもないですが、『多くの経験』というのは大きいかもしれないですね。」

鹿島田：

「自分が本当の意味で『ベテラン』といえるのかは分かりません。30歳過ぎて8回目のチャレンジで世界チャンピオンになったヨルゲン・モルテンソンは若い頃の自分を評して、『ハングリーすぎた』と振り返っています。ただただ競技で勝つことばかり考えるよりも、いろいろな価値

観の中で競技を捉えることができるようになる、それが良しくも悪しくも『ベテラン』といわれる人々なのかもしれません。」

Q7

「今度は『ベテラン』として今後世界を目指す若手選手にメッセージを贈っていただければ、と思います。」

田島：

「今を楽しむこと、オリエンテーリングをもっとももっと好きになること、チャレンジングな気持ちを持つことかな。」

鹿島田：

「やはり諸行無常の世の中ですから、自分や自分の環境が永遠に変わらないことはありません。いろいろな意味で、競技と自分の関り方が変遷していくことを許容し、またその変化を楽しむことが大切かもしれません。」

Q8

「最後に何でも結構ですので一言お願いいたします。」

田島：

「本戦は直前に迫ってきています。選手も最高のパフォーマンスを引き出すべく準備を進めています。私たちが励みになるのはみなさんの応援です。それだけで1秒でも2秒でも速く走って頑張ることができるでしょう。どうぞ応援よろしくお願ひします。」

鹿島田：

「気がつけばあと2ヶ月。5年前のライブニッツ（で行われた会議での、世界選手権日本開催決定）から本当にあっという間でした。チームメイト10人の10時間に及ぶ努力をほんの30秒のゴールレーンで失ったTore Sandvik（*）。最後までなにがおこるか分かりません。5年間の道のりの最後の2ヶ月を丁寧に仕上げたいと思います。」

(*世界最大級のリレーイベント・Tiomilaで、優勝候補Haldenのアンカーとして終始先頭を走るも、最後にゴールレーンを辿り間違え逆転負けを許した。

インタビューを終えて

「自分はベテランとは言えないのではないか」という謙遜をにじませた両選手でしたが、奇をてらうことのない地に足が着いた回答ぶりはまさにベテランのそれでした。両選手は競技人生最大級の舞台を控えた今、「赤く燃え盛る炎」というよりも「青く静かに燃える炎」といった雰囲気を感じさせています。実際は赤い炎よりも熱い青い炎の、暑い愛知での完全燃焼に期待したいものです。

(松澤俊行)



<松澤俊行プロフィール>

1972年静岡県生まれ。東北大学に入学した1991年からオリエンテーリングを始める。現在は愛知教育大学 教育学部 生涯教育課程 スポーツ健康コースで生涯スポーツの指導について学ぶ。2000年度・2003年度全日本選手権優勝。1999年・2001年・2004年世界選手権日本代表。ホームページURLは <http://members.aol.com/mazzawa/>